

## 書かれた「この地」を読む

## 📖 みのかもブックマーク



▲かつての播隆の歌碑(左端)の写真(美濃加茂市民ミュージアム蔵)

▲『美濃と飛騨の旅』の挿絵  
「木曾川下り」小杉放庵／絵  
(国立国会図書館デジタルコレクションより)

## 「木曾川下り」と播隆の歌碑

木曾川を訪れた画家の一人に、昭和初期に風景案内記を手掛けた小杉放庵がいます。放庵の絵と田中純の文による『美濃と飛騨の旅(日本風景協会・1931年)』には、二人が太田観光と川下りを楽しんでた様子が記され、放庵による挿絵「木曾川下り」には岩場近くを進む舟の景が描かれています。

太田に着き、木曾川の岸に出た二人は、旗に書かれた「日本ライン」という呼び名に違和感を覚えたようで、田中は「木曾川」という古来の名前を使うべきと文中で述べています。

また祐泉寺では、槍ヶ岳の開山者でこの地に没した僧・播隆の歌碑を読みます。田中は熱を帯びた文体でこう書きました。

この古人の、盛んな登高慾に心を打たれた。これは一修験者の征服慾と言はんよりは、むしろ一登高家の旺しく純粹な征空慾だ。近代アルピニズムの先駆だ。

この旅の3年後、放庵が「日本アルプスからペンキの看板迄(『風景』第1号・1934年)」に太田の町の回想文を書いています。

あの、日本ライン観光の舟の出る處、何と云つたか覚えて居ないが、美濃地の小さな町、川に面した丘の中途に、初めて槍が岳の頂上を極めたと云ふ、徳川時代の某僧の碑が立って居たのを思ひ出す

こすぎほうあん  
小杉放庵  
(1881-1964)

栃木県日光に生まれる。洋画を学び、未醒の名で漫画や挿絵、油彩を手掛けるが、後に雅号を放庵(放菴)に改め、後年は水墨や日本画の制作に傾倒した。

たなかじゆん  
田中純  
(1890-1966)

広島県広島市に生まれる。早稲田大学英文科卒業。吉井勇、久米正雄らと雑誌『人間』を創刊。小説や翻訳を手掛け、劇作家としても活躍した。

📍みのかも文化の森  
☎28-1110